

| | | | |
|--|--|---------|-------|
| 年度 2009 学期「前期」「後期」 | 曜日・校時 「前期」月曜・4校時 「後期」木曜・2校時 | 必修選択 選択 | 単位数 2 |
| 授業科目/(英語名) | 生体の機能 (生体と薬: 病を治す) Basic Human Physiology (Life and Drug) | | |
| 対象年次 1・2年次 | 講義形態 講義 | 教室 | |
| 対象学生(クラス等) 全学部 | 科目分類 人間科学科目 | | |
| 担当教員(科目責任者) / Eメールアドレス/研究室/TEL/オフィスアワー 丹羽正美/niwa@nagasaki-u.ac.jp/医学部基礎棟 4 階 薬理学教室/095-819-7041/17:00-18:00 | | | |
| 担当教員(オムニバス科目等) | 丹羽正美、佐々木均、山下康子、田中邦彦、藤秀人、中川慎介 | | |
| <p>授業のねらい</p> <p>人類の科学の進歩における疾病治療薬の重要性を学ぶと共に、生体の機能と薬の相互関係、薬、毒物、日常の嗜好品、麻薬、覚醒剤などの危険性についての理解も深める。モルヒネの詳しい薬効が既に紀元前9世紀から8世紀のホメロスの「オデッセイア」に、ペンテ「静かな心地よさと幸福感、そして安らかな満ち足りた眠気と睡眠」と記載されている等を学び、長い人間の歴史と薬の発見の過程を洞察する。</p> <p>授業方法(学習指導法)</p> <p>講義の概略をまとめた講義ノートを配布し、適宜、スライドをまじえて講義する。</p> <p>授業到達目標</p> <p>治療薬の有効性と生体への効果・作用がかならずしも一致しないことを理解する。薬の有害事象の理解を深める。薬の作用機序を生体機能との関連で説明できる。麻薬の危険性を理解し、社会的位置付けを指摘できる。</p> | | | |
| <p>授業内容(概要) / 授業内容(毎週毎の授業内容を含む)</p> <p>概要</p> <p>人類の科学の進歩における薬の重要性、生体の機能と薬の相互関係、日常の嗜好品、および麻薬、覚醒剤などの危険性を講義する。</p> <p>第1回 薬の誕生/人類の歴史の中で、薬が如何に発見されてきたか。</p> <p>第2回 薬の使用目的と適用/薬の多様な使用法、治療薬の選択</p> <p>第3回 薬の効果に影響を及ぼす要因/生体機能と薬の相互作用</p> <p>第4回 薬の体内動態/種々の生体分子と薬の関わり、薬効と有害事象の発症要因。</p> <p>第5回 妊娠と薬/胎児を保護する投与方法と、禁忌の薬、妊娠と薬の新たな相互作用</p> <p>第6回 脳と薬I/心と薬、運動機能改善薬、睡眠と薬</p> <p>第7回 脳と薬II/神経細胞を保護する薬の開発、アルツハイマー病薬の開発の展望</p> <p>第8回 生体と嗜好品/保健医薬品などと薬の開発</p> <p>第9回 薬の乱用/乱用薬物、麻薬などの作用と危険性</p> <p>第10回 感染症と薬/抗菌薬と抗ウイルス薬の発展</p> <p>第11回 癌と薬/新しい抗癌剤の開発の方向性</p> <p>第12回 ホルモンと薬/生体物質としての内分泌性物質</p> <p>第13回 生活習慣病と薬 /社会生活と疾病、薬の意義</p> <p>第14回 薬の有害作用/治療薬としての有害事象の種類と発生要因</p> <p>第15回 授業の総括</p> | | | |
| キーワード | 治療薬、 | | |
| 教科書・教材・参考書 | 教科書は用いず、授業計画にそって、プリント資料・スライド・液晶モニターで講義する。参考文献は適宜紹介する。 | | |
| 成績評価の方法・基準等 | 毎回行う課題レポート(80%)と小テスト(20%) | | |
| 受講要件(履修条件) | 原則として全回出席をしなければ単位は成立しない。ただし、やむを得ず(正当な理由で)欠席する場合は、個別指導を行う。 | | |
| 本科目の位置づけ / 学習・教育目標 | | | |
| 備考(準備学習等) | 講義形態であるが、予め課題を適宜設定し、学生との討論を行うことがある。 | | |